対流雲の発達に関する数値実験(II)*

一一含水量の相異による影響――

米 谷 恒 春**

国立防災科学技術センター

Numerical Experiment on the Development of Convective Clouds (II) ——The Effect of the Difference in Liquid Water Content——

By

Tsuneharu Yonetani

National Research Center for Disaster Prevention, Tokyo

Abstract

Three comparative experiments are performed using an axisymmetric cumulus cloud model with Kessler's parameterizations for microphysical processes. There is the main difference in temperature profile between the initial states of atmosphere for runs 1 and 2. The air temperature at a certain level for run 2 is lower than one at the same level so that liquid water content for run 2 may be smaller. Air temperature profile for run 1 is as follows: Temperature at 1 km level (T_1) is 20°C and lapse rates above 1 km (Γ_u) and below 1 km (Γ_l) are 6.0°C km⁻¹ and 9.0°C km⁻¹, respectively. That for run 2 is $T_1=15^{\circ}$ C, $\Gamma_u=6.6^{\circ}$ C km⁻¹ and $\Gamma_l=9.0^{\circ}$ C km⁻¹. The atmospheric stratification and initial conditions for run 3 are the same as those for run 1, and 10 per cent of the rate of condensation in ascending moist air is treated to be excluded from the domain.

A comparison between runs 1 and 2 shows the following: (1) The atmospheric stratification for run 1 is more unstable than that for run 2. (2) Although the updraft for run 1 grows more vigorously than for run 2 at early times, the maximum updraft in space and time for run 1 is smaller than for run 2. (3) It is suggested that this occurs as the result of smaller rate of condensation in ascending moist air for run 2 than for run 1, which arises from lower temperature for run 2.

A comparison between runs 1 and 3 shows that the difference in the amount of liquid water contained in a cloud makes little difference in the intensity of a cumulus cloud at early times and considerable difference at highly developed

^{*} 本報告は特別研究「積雲対流がもたらす災害の発生機構に関する研究」の一環としてなされたもの である.

^{**} 第1研究部異常気候防災研究室

stage. For example, the maximum updraft at 30 minutes for run 3 is 1.2 times as large as that for run 1. It is also shown that 10 per cent decrease of rate of condensation causes the delay of time by 1 minute when rain water reaches at z=0.5 km of the central axis and causes the delay of time by 2 minutes when downdraft forms at this point.

The results suggest that the difference in the amount of liquid water affects the intensity of cumulus convection and consideration is given to this when we study the development of convective clouds in atmospheric stratifications with different air temperature by several degrees centigrade at lower levels.

1. まえがき

対流雲における雲物理学的過程と力学的過程との相互作用については、主に数値実験の方 法により調べられている.相互作用の一つに水滴の重さによる下降流の形成がある.すなわ ち、上層からの雨滴の落下と下方からの水(水蒸気と液水)の補給の二つの過程を通じて、 低い高度にたまった液水の重さが下降流の形成に寄与している(Das, 1964; Takeda, 1966; Srivastava, 1967).また一般に、上昇流中に含まれる液水は仮温度差によって生じる上向き の力を減じ、4gm/kgの含水量は温度差を約1°C減ずることとほぼ同等の作用をすると言 われている(Newton, 1967).したがって雲中における含水量が異なる場合、対流雲の力学 的過程にかかわる物理量にも相異がでてくることは考えられることである.含水量の異なる ことが対流雲の発達にどの程度の影響を及ぼしているかを、数値実験の手法により調べた. その結果を報告する.

2. 基本式と初期条件

2.1. 記 号

この報告で記号は次の意味を有している.

- Cp 定圧比熱
- g 重力加速度
- Pc 雲水が生成または蒸発する割合
- P_r 雲水が雨水になる割合 $Q_t (=Q_t + Q_r)$ 液水の量 $Q_t (=Q_t + Q_r + Q_t)$ 水の全量
- qs 飽和比湿
- R_v 気体常数
- T_v 仮温度

- Le 水の気化熱
- P 気圧
- Pe 雲と周囲大気との混合または雨水が未 飽和域に落下した際に,雲水または雨 水が蒸発する割合
- Qc 雲水量
- Qr 雨水量
- Qv 水蒸気量
- r 水平距離
- T 気温
- t 時間

u	大気の水平速度	V_r	雨水の対気平均速度
w	大気の上昇速度	z	垂直距離
Γď	乾燥断熱減率	η	渦度
ע (=	500 m ² sec ⁻¹) 拡散係数	ho	密度

なお記号の上に―を施したものは初期状態の値であることを示している.

2.2. 基本式

モデルにおける仮定は前の報告(米谷, 1975)に記してあるものと同じで,基本式は次の とおりである.

$$\begin{aligned} \frac{\partial u}{\partial t} &= -u\frac{\partial u}{\partial r} - w\frac{\partial u}{\partial z} - \frac{1}{\bar{\rho}}\frac{\partial P}{\partial r} + \nu \left(\frac{1}{r}\frac{\partial}{\partial r}r\frac{\partial u}{\partial r} + \frac{1}{\bar{\rho}}\frac{\partial}{\partial z}\bar{\rho}\frac{\partial u}{\partial z} - \frac{u}{r_{2}}\right) \end{aligned} (1) \\ \frac{\partial w}{\partial t} &= -u\frac{\partial w}{\partial r} - w\frac{\partial w}{\partial z} + g\left(\frac{T_{v} - \bar{T}_{v}}{\bar{T}_{v}} - Q_{i} - \frac{P - \bar{P}}{\bar{P}}\right) - \frac{1}{\bar{\rho}}\frac{\partial(P - \bar{P})}{\partial z} \\ &+ \nu \left(\frac{1}{r}\frac{\partial}{\partial r}r\frac{\partial w}{\partial r} + \frac{1}{\bar{\rho}}\frac{\partial}{\partial z}\bar{\rho}\frac{\partial w}{\partial z}\right) \end{aligned} (2)$$

$$\frac{\partial \eta}{\partial t} = -u\frac{\partial \eta}{\partial r} - w\frac{\partial \eta}{\partial z} + \left(\frac{2w}{\bar{\rho}}\frac{\partial \bar{\rho}}{\partial z} + \frac{u}{r}\right)\left(\eta - u\frac{\partial \bar{\rho}}{\partial z}\right) + uw\frac{\partial^2 \bar{\rho}}{\partial z^2} - \bar{\rho}g\frac{\partial}{\partial r}\left(\frac{T_v}{\bar{T}_v} - Q_i\right)$$

$$+\frac{\bar{\rho}g}{\bar{P}}\frac{\partial(P-\bar{P})}{\partial r}+\nu\left(\frac{1}{r}\frac{\partial}{\partial r}r\frac{\partial\eta}{\partial r}+\frac{1}{\bar{\rho}}\frac{\partial}{\partial z}\bar{\rho}\frac{\partial\eta}{\partial z}-\frac{\eta}{r^{2}}\right)$$
(3)

$$\frac{\partial Q_t}{\partial t} = -u \frac{\partial Q_t}{\partial r} - w \frac{\partial Q_t}{\partial z} + \frac{1}{\bar{\rho}} \frac{\partial}{\partial z} (\bar{\rho} V_r Q_r) + D_{Q_t + Q_t}$$
(4)

$$\frac{\partial T}{\partial t} = -u \frac{\partial T}{\partial r} - w \left(\frac{\partial T}{\partial z} + \Gamma_d \right) - \frac{L_e}{c_p} P_e + D_T \tag{5-1}$$

$$= \left\{ -u \frac{\partial T}{\partial r} - w \left(\frac{\partial T}{\partial z} + \Gamma_d \right) + \frac{L_e}{c_p} \frac{\partial q_a}{\partial t} + D_T \right\} / \left(1 + \frac{L_e^2 q_s}{c_p R_v T^2} \right)$$
(5-2)

$$\frac{\partial Q_v}{\partial t} = -u \frac{\partial Q_v}{\partial r} - w \frac{\partial Q_v}{\partial z} + P_e + D_{Q_v} \tag{6-1}$$

$$=\frac{\partial q_s}{\partial t} \tag{6-2}$$

$$\frac{\partial Q_c}{\partial t} = -u \frac{\partial Q_c}{\partial r} - w \frac{\partial Q_c}{\partial z} + P_c - P_r + D_{Q_c} \tag{7}$$

ただし未飽和域では (5-1) と (6-1) を使用し, 飽和域では (5-2) と (6-2) を使用した. 任意 の物理量 f の拡散項を D_f で表わしてあり, (8) 式の形をしている.

$$D_{f} = \nu \left(\frac{1}{r} \frac{\partial}{\partial r} r \frac{\partial f}{\partial r} + \frac{1}{\bar{\rho}} \frac{\partial}{\partial z} \bar{\rho} \frac{\partial f}{\partial z} \right)$$
(8)

温度,水蒸気量,雲水量および雨水量に対して境界条件は設けず,直接計算して求めた. r=0以外の境界における拡散項の計算は Soong and Ogura (1973) に従い,横軸 (r 軸) に 垂直な境界においてはr方向の差分を 0,縦軸 (z 軸) に垂直な境界においてはz方向の差

国立防災科学技術センター研究報告 第15号 1976年10月



図 1 初期じょう乱の大きさ、温度プロファイル(T)、湿度プロファイル(RH)の図示 Fig. 1 The domain of initial disturbance and initial states of temperature T and relative humidity RH. There is a difference in the initial profile of temperature between runs 1 and 2. The saturated region with the same temperature as the environmental air temperature is given as the initial disturbance. The height of the domain is 10 km and the distance between the center of the cloud to the lateral boundary is 20 km.

分を0とした、上記以外の物理量に対する境界条件は前の報告での境界条件と同一である*1.

2.3. 初期条件

気温場,湿度場,および気圧場の初期状態は次のとおりである(図1参照). 気温場については run 1 と run 2 とで変えてある. 即ち, run 1 では高度 1km における気温を 20.0° C とし, 1km より上層および下層での気温減率を変え,地表面で 29.0° C, 10km で -34.0° C とした. 他方 run 2 では 1km における気温を 15.0° C 地表面では 24.0° C, 10km では -44.4° C である. 湿度場については両方とも同じとし,地上より 2km までは 一定で 80.0%, 2km より上層では 1km につき 7.5% の割合で逓減させた. 初期状態に おける大気については静止しているとした. 初期じょう乱として, $z=1\sim3$ km $r=0\sim2$ km の領域に周囲大気と気温の等しい飽和大気を置いた. なお積分領域は $z=0\sim10$ km, $r=0\sim2$ km であり,格子間隔は dr=1km と dz=0.5km,時間間隔は 15秒である.

3. 結果

全ての場合について 60 分までの状態をシミュレイトした. 上昇速度が最も大きくなった

^{*1} このような境界条件の変更が対流雲の発達へ与える影響はほとんど無視できるものであった。例えばこの報告での run 1 と同じ大気状態と初期条件における結果を比較してみると、以前の境界条件を使用したときでは上昇速度の時間空間における最大値は 31 分に 5.5 km で 18.3 m/s となったのに対し、この報告で用いた方法では 32 分に 5.5 km で 17.7 m/s と、その差は約 3% であった。

のは40分以前であった、この報告では40分までの状態を調べることにする.

3.1. run 1

図2に run 1 の中心軸における,上昇速度の時間変化と単位質量当りの仮温度差によっ て生じる力 $g(T_v - \bar{T}_v)/\bar{T}_v$ および単位質量の気塊に含まれる液水の重さ gQ_i の時間変化を示 した.上昇速度の各時刻における最大値は 9 分頃から 3 m/s より大きな値となっており,時 間空間における最大値は 32 分に 5.5 km での 17.7 m/s である.地表面付近で下降流が形成 されたのは 16 分頃である.5 km 周辺より上層にも下降流の占める領域があるが,ここでの 絶対値は高々 0.4 m/s である.次に $g(T_v - \bar{T}_v)/\bar{T}_v$ の様子を見てみよう.この値が負となる 領域が 2 ヵ所ある.上方の領域は雲頂周辺にあり,雲水の蒸発および雲中で加速された気塊

10 W





図 2 run 1 の結果. 中心軸における上昇速度 w (m/s), 単位質量当りの仮温度差による力 $g(T_v - \overline{T}_v)/\overline{T}_v$ (dyn/gm) および単位質量の気 塊に含まれる水の重さ gQ_i (dyn/gm) の時間 変化. 影を施した部分は仮温度差による力が 負の領域である.

Fig. 2 Time-height variations of vertical velocity w (m/s), specific force of the difference of virtual temperature $g(T_v - \bar{T}_v)/\bar{T}_v$ (dyn/gm) and the weight of liquid watet contained in a unit ait mass gQ_l (dyn/gm) at the central axis for run 1. Shaded areas indicate that $g(T_v - \bar{T}_v)/\bar{T}_v < 0$.



comparison between figs 2 and 3 shows the effect of the difference of the rate of condensation in ascending moist air upon the development of a convective cloud. The difference of the rate of condensation in ascending moist air is produced by the difference of temperature.

の上昇によって生じたものである. ただし 10 分以前にこの領域が上層へ拡がっているが, この部分は雲水の蒸発によるものではなく初期じょう乱として比較的大きな力 (1.5~2 dyn/ gm) を受けた気塊が上昇した結果である. ここでの値は -1 dyn/gm より大きく, 10 分以 降の領域では -2 dyn/gm より小さい領域があることと比較すると,かなり大きな値である. 下方における負の領域は 15 分以降に認められる. gQ_i の図に見られるように雨水が地表に 到達したのが 19 分頃であるから,雨水の蒸発によって先ず生じたものであることが分かる. その後雨水を含んだ気塊が湿潤断熱的に下降してくるために $g(T_v - \bar{T}_v)/\bar{T}_v$ の値は負で絶対 値が大きくなっている. 地表面では短時間のうちにかなりの温度降下 (温度に直 して ほぼ 3°C の降下)が生じている.

 $g(T_v - \bar{T}_v)/\bar{T}_v$ の時間空間における最大値は 32 分高度 6 km における 24.6 dyn/gm であ り、 gQ_i のそれは 37 分高度 6 km における 13.4 dyn/gm である. 上昇速度と仮温度差によ る力の最大値はほぼ同時刻に現れたのに対し、含水量が最大値を示した時刻は約5分遅れて いる. これは対気速度を持つ雨水が気塊と異なる運動をしたためである.

3.2. run 1 と run 2 との比較

まず run 2 の中心軸における上昇速度の時間変化を見てみよう (図 3 参照). 各時刻にお ける最大値が 3 m/s を越えるようになったのは 11 分を過ぎてからであり, 時間空間におけ る最大値は 33 分 6 km における 19.1 m/s である. これを run 1 と比較してみると, 各時 刻における最大値が 3 m/s を越えた時刻は run 1 の方がほぼ 2 分早い. しかし時間空間に おける最大値は run 1 の方が 1.4 m/s 小さくなっている. すなわち, 対流雲発達の初期段 階においては run 1 の方が run 2 よりも上昇流は大きな値を有しているが, 対流雲が最も 発達した段階においては逆に run 2 の方が run 1 よりも大きな値となっている. また下降 流は全体的に run 1 の方が早い時刻に形成されている. 例えば z=0.5 km における下降流 が形成された時刻は, run 1 では 19 分と 20 分の間であるのに対して, run 2 では 22 分と 23 分の間である.

次に仮温度差によって生じる力の場を比較してみよう. 雲水および雨水の蒸発,下降流が形成された時刻の相異の影響によって $g(T_v - \bar{T}_v)/\bar{T}_v$ の値は全領域で必ずしも run 1 の方が大きくなってはいない. しかし各時刻における最大値は常に run 1 の方が大きい. この場の値は大気の垂直安定度と直接関係しているから,大気の垂直安定度は run 1 の方が run 2 より不安定であることを,上記のことは示している. ちなみに,エントレインメントは無いとして定常状態を仮定した1次元対流雲モデルによる上昇速度の最大値は, run 1 の 27.9 m/s に対し run 2 では 22.7 m/s である (定常状態を仮定した1次元対流雲モデルの方程式系については例えば米谷 (1974)を参照). なお 10 分以前における $g(T_v - \bar{T}_v)/\bar{T}_v$ が負の領域は run 1 の方が run 2 より広くなっている. この相異は, run 1 の方が run 2 よりも大気の成層状態が不定安であったためだけではなく,初期じょう乱の強さが run 1 の 1.5~2.0

dyn/gm に対して run 2 は 1.0~1.4 dyn/gm と run 1 の方が強いために生じたものである.

最後に水の重さの場を見てみよう. run 2 で雨水が地表に到達したのは22分頃であり, run 1 の時よりも約3分遅くなっている. 雲頂高度は初期の段階においては run 1 の方が わずかであるが高い. しかし28分を過ぎてからは run 2 の方が高くなっている. 28分以降 の雲頂周辺を除いたほぼ全領域で run 1 の方が run 2 よりも含水量は多くなっている. こ のことが, run 1 における大気の成層状態と初期じょう乱の強さの両方が run 2 における より対流雲の発達に適した条件となっていたにもかかわらず, 上昇速度の時間空間における 最大値は run 2 の方が大きくなったことと密接に関係していると考えられる. なお run 1 において含水量が run 2 より多くなったのは, 飽和蒸気圧の温度に対する変化は温度が高 いほど大きいことが主たる原因である.

3.3. run 1 と run 3 との比較

run 1 と run 2 とでは大気の成層状態が異なっていた. そこで含水量の相異だけに基づく対流雲の発達状態の相異をみるために, run 3 なる数値実験を行った. すなわち, run 3 では人気の成層状態および初期条件を run 1 と同一にし, 凝結して出来る水の量の 10% を 減じた. 図4に run 1 と run 3 の中心軸における上昇速度, 仮温度差によって生じる力お





Fig. 4 Time variation of maximum w, $g(T_v - \bar{T}_v)/\bar{T}_v$ and Q_i at the central axis for runs 1 and 3. This shows that the artificial decrease of 10 percent in the amount of condensation of vapor causes the difference in maximum w and $g(T_v - \bar{T}_v)/\bar{T}_v$ after 10 minutes.

- 29 -

国立防災科学技術センター研究報告 第15号 1976年10月



図 5 中心軸の z=0.5 km, z=2.0 km, z=3.5 km における run 3 の含水量(破線)と run 1 の含水量の 10% を滅じた値(実線) の時間変化,および z=0.5 km における上昇速度の時間変化

Fig. 5 Time variation of Q_i for run 3 (broken lines) and the value of liquid water contents decreased by 10 percent for run 1 (solid lines) at z=0.5 km, z=2.0 km and z=3.5 km of the central axis. Time variation of w for run 1 (solid line) and for run 3 (broken line) at z=0.5 km is also shown. The time when rain water reaches at z=0.5 km for run 1 is earlier than for run 3 and the time when down draft forms at z=0.5 km for run 1 is also earlier than for run 3.

よび含水量の各最大値の時間変化を示した. 凝結により出来る水の量を減じた影響はある程 度時間がたってから現れている.対流雲の発達の程度に明らかな差が生じたのは 10 分以降 である. 30 分における上昇速度の最大値は, run 1 の 17.6 m/s に対し run 3 では 21.3 m/s と 20% 以上の増加となった. なお run 2 における含水量の最大値の時間変化も図4 に示 した. これから分かるように,含水量の最大値は run 3 の方が run 2 より常に大きくなっ ている.

run 1 における含水量の 10% を減じた値と run 3 における含水量の時間変化を図 5 に示 した. 初期じょう乱の中心にあたる z=0.5km では, 20 分頃まで両方はほぼ同じ値を示し た. z=3.5km では run 3 において対流雲が 10 分以降により発達したことに対応して, run 3 における含水量は run 1 における含水量の 10% を減じた値より大きな値を示している. z=0.5km では水が存在するようになった時刻は run 1 の方が早く, run 1 の 10% を減 じた含水量のほうが run 3 における含水量より多くなっている時間帯がある. この高度では 水のほとんどが雨水であって, 雲水は run 1 で 19 分~21 分の間に, run 3 では 20 分~22

対流雲の発達に関する数値実験(Ⅱ)―米谷

分の間にわずかな量が存在しただけである.また,この高度における上昇速度の時間変化を 見ると,run 1 では19分と20分の間で,run 3 では21分と22分の間で,下降流が形成さ れている.つまり,水蒸気の凝結により出来る水の量を10%滅じた影響は,z=0.5km に 雨水が到達する時刻が約1分遅延する形となって現れ,さらには下降流が形成される時刻が 約2分遅延する形となって現れている.

4. まとめ

含水量の相異が対流雲の発達に与えている影響を調べることを目的とし,三つの場合について数値実験を行った. 雲中の気温は含水量を決める一つの要因になっているから, run 2 には全体的に run 1 より低い気温の成層を与え,含水量が run 1 より少なくなるようにした. run 3 では大気の成層状態と初期条件を run 1 と同一にして, 凝結して出来る水の量の 10% を減じた.

run 1 においては run 2 におけるより、大気の成層状態および初期じょう乱の強さの両条件が対流雲の発達により適したものであった。それでいて対流活動は初期の段階では run 1 の方が活発であったが、30 分には逆に run 2 の方が活発となった。run 1 と run 3 とにおける上昇速度の最大値の時間変化を比較すると、10分まではほとんど相異は現れなかったが、対流活動の最盛期にあたる 30 分頃には run 3 における値は run 1 の1.2 倍以上になった。

凝結により出来る水の量を 10% 減じた影響は z=0.5 km に雨水の到達する時刻の遅延 となって現れ,さらに下降流形成時刻の遅延となって現れていた.ところで,下降流が形成 されるまでは対流活動は一方的に強められているが,下降流が形成されると対流活動は抑制 されることを前の報告で示した (米谷,1975).このことと, run 1 と run 3 とで 10 分ま での対流活動にほとんど差が生じなかったことを考え合わせると,低い高度での下降流形成 時刻の相異がその後の対流雲の発達に与えている影響の程度は大きいと考えられる. run 1 と run 2 と run 3 の含水量の一定時刻における最大値を比較すると, 常に run 2 が最も 小さく,そして z=0.5 km における下降流形成時刻は run 2 が最も遅かった.もし run 2 の垂直安定度が run 1 と同程度であったとすれば,この場合の上昇速度の時間空間における 最大値は run 1 の 1.2 倍以上の大きな値となったであろう.

気象庁発行の Aerological Data of Japan, 5-year Period Avarages (1961~1965) によれ ば, 館野における 900 mb の高度と気温の5年平均値は, 6月では 994 m と 15.5°C, 7 月では 1001 m と 19.7°C である. 日本の初夏と盛夏のように気温が異なる時期における 対流雲の発達を論じるときには, 含水量の相異も考慮しなければならない項目の一つである ことを, run 1 と run 2 の結果は示唆している.

参考文献

- Das, P. (1964): Role of condensed water in the life cycle of a convective cloud. J. Atmos. Sci., 21, 404-418.
- Newton, C.W. (1967): Severe convective storms. Advances in Geophysics, vol. 12, Academic Press, 257-308.
- Srivastave, R.C. (1967): A study of the effect of precipitation on cumulus dynamics. J. Atmos. Sci., 24, 36-45.
- 4) Takeda, T. (1966): The downdraft in the convective cloud and raindrops: A numerical computation. J. Meteor. Soc. Japan, 43, 1-11.
- 5) 米谷恒春 (1974): 北関東地方の雷雨発生日の大気安定度.国立防災科学技術センター研究報告, 9,47-53.

(1975): 対流雲の発達に関する数値実験.国立防災科学技術センター研究報告,14,81 -98.

(1975年12月11日原稿受理)